様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２４０３

研究課題名（和文）配偶者と死別した男性高齢者の心理回復過程と対処行動に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Psychological Recovery Process and Coping of Elderly Widowers Bereaved of Their Spouses

研究代表者
室屋　和子（Muroya, Kazuko）

佐賀大学・医学部・准教授

研究者番号：５０２９９６４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は男性高齢者の死別後の心理過程と対処行動を明らかにすることを目的としている．Covid-19の影響で研究の進捗状況は遅れたが，2020年までに男性9名，比較のために女性3名のインタビュー調査を行った．インタビューデータを質的手法で分析し，死別後の男性高齢者の対処行動を明らかにした．この結果をもとに死別後の対処行動と精神的健康との関連を量的研究にて明らかにするために調査票の作成に取り組んだ．研究者で検討を重ね調査票を完成させ，2021年に地域で暮らす高齢者を対象にアンケート調査を実施した．調査票を1,000部配布，864部回収し，そのうち死別者212名のデータを分析対象として分析を行った．

研究成果の学術的意義や社会的意義
配偶者と死別した男性高齢者の健康問題は深刻であり死別後も残りの余生を健やかにその人らしく生活するための支援は重要な課題であるが，先行研究において高齢女性の死別後に関する研究は多くみられるが男性を対象としたものは少ない．本研究により，死別後に趣味や役割を持つことが死別後の適応を促進するための対処行動となりうるとの示唆を得た．加えて男性は女性に比べて死別後の精神的健康の得点が低いことや死別後の対処に特徴がみられることが明らかとなった．これらの結果は，男性高齢者が配偶者との死別後に社会生活への適応を促進するための支援モデルの開発の重要な知見になりうると考える．

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the psychological processes and coping elderly widowers following bereavement. Progress on the study was delayed due to Covid-19. However, by 2020, 9 men and 3 women were interviewed for comparison. The interview data were analyzed using qualitative methods to clarify the coping of elderly widowers after bereavement. Based on these results, a survey questionnaire was developed to clarify the relationship between coping after bereavement and mental health in a quantitative study. The researchers completed the questionnaire and conducted a questionnaire survey of elderly people living in the region in 2021. A total of 1,000 copies of the questionnaire were distributed. Of these, 864 copies were collected, and data from 212 bereaved persons were analyzed.

研究分野：看護学

キーワード：bereavement　coping　elderly widower

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

高齢者は，身体機能の衰退や社会的役割の喪失など，さまざまな変化に見舞われる．中でも配偶者の死は．愛情対象や性役割，さらに自己観までも脅かすもっともストレスフルなライフイベントとされる．一般的に男性高齢者は，健康や職業の喪失に加え，子どもの独立によって父親役割を失う．配偶者が自分より先に死亡した場合は夫役割も失うことになる．配偶者との死別は，これまで夫婦関係において相互作用し，妻が果たす役割によって与えられてきた愛情と生活基盤の恩恵，夫役割を果たすことで妻に与えてきた愛情と役割の喪失を体験する．60 歳以上男性の死別者の自殺死亡率が有配偶者の 3 倍であるという統計結果もみられ，高齢者の自殺の背景には死別という問題がある．核家族化を背景に配偶者と死別後に独居ないしは家庭内で孤立する高齢者は今後も増加傾向にあると推測され，高齢社会の観点においても，男性高齢者が配偶者と死別した場合，故人のいない生活への支援は重要課題である．

死別の場合，対処すべき課題は喪失そのものだけでなく，故人がいない生活に向き合わなければならない．具体的には家事や故人が果たしていた役割の会得，生活の再建，新しい役割やアイデンティティの獲得などである．この点に着目し，インタビュー調査を行った結果，死別後の男性高齢者は，地域・家庭内での役割を果たすことで故人を偲び，自負心を高め，これから生活していくことの意志を自分自身で確かめており，これらの心理過程や経験を活かした活動，社会的役割を継続していくための支援が必要であると示された．そこで，本研究では，先行研究で得られた結果をもとにさらに発展させたいと考えた．

２．研究の目的

配偶者死別後の男性高齢者について以下の点を明らかにする．

１）死別後の心理過程の特徴

２）生活上の二次的問題と対処行動，家庭内・地域社会における役割

３）１）２）を踏まえて死別後の心理回復過程と対処行動・役割遂行との関連

３．研究の方法

１）インタビューによる面接調査

(1)対象者

在宅で生活している男性高齢者．独居または家族同居は問わないが偏りがないようにサンプリングする．男性高齢者の死別後の心理過程の特徴を明らかにするために女性高齢者へのインタビューも行う．

(2)調査方法

半構造化インタビューによる面接調査

(3)調査内容

死別後に生じる二次的問題と対処行動，死別後の役割の有無と遂行状況，心理過程

(4)分析方法

質的帰納的方法

(5)倫理的配慮

①地域住民を対象とするため，対象者が利用している研究協力施設に研究の趣旨や方法の説明を行い，同意を得たうえで対象候補者の紹介を受けた．

②参加の任意性を確保するために，対象者本人には研究の説明を口頭および文書で行い同意を得た．インタビュー内容が他者に漏れないようプライバシーを保てる場所で行い，研究の成果発表の際は，個人が特定されないように匿名化した．研究参加の任意性，途中辞退，不参加により不利益を受けないことを説明した．佐賀大学医学部倫理委員会（承認番号：30-5)．

２）質問紙票を用いたアンケート調査

(1)対象者

A 市老人クラブ連合会に所属する高齢者．対象の条件はインタビュー調査と同じ．

(2)調査方法

無記名自記式調査票を用いたアンケート調査

(3)データ収集期間

2021 年 8 月～10 月

(4)調査内容

属性および説明変数としてインタビュー調査によって抽出された対処行動を説明変数とし，現在の精神的健康状態（目的変数）として WHO-5 精神的健康状態表（以下：WHO-5)，PGC モラールスケール（以下：PGCM）を用いた．

(5)分析方法

属性は記述統計，尺度の内的整合性は Cronbach’sα係数，属性と WHO-5/PGCM は students-t 検定または Tukey 検定，死別対処尺度と WHO-5/PGCM の相関は Pearson 積率相関係数，各因子と WHO-5/PGCM との関連は重回帰分析を行った．

(6)倫理的配慮
①研究協力施設の代表者に研究の趣旨等の説明を行い，署名にて同意を得た．
②研究対象者へは，研究目的，研究参加の自由意志の保障，個人情報保護，希望する場合の結果の開示等について書面で説明し，調査票に同意を示すチェック欄を設けた．佐賀大学医学部倫理委員会（承認番号：R1-58）．

４．研究成果
１）インタビュー調査による質的研究結果（男性）
(1)対象者の概要
男性 9 名の内訳として，年齢は 70 歳前半から 90 歳前半，死別後期間は 1 年から 30 年，家族構成は息子と二人暮らしが 2 名で，他 7 名は独居であった．役割等については，死別前から死別後にかけて高齢者家族会所属が 5 名で，他の 4 名は元新聞社勤務，絵画講師などであった．
(2)分析結果
9 名のインタビューデータを分析した結果，172 コードが抽出され，23 サブカテゴリ，4 カテゴリが見いだされた．
カテゴリ【妻を偲びながら夫婦の絆により再生される】は，死別後に亡き妻への揺れ動く思いを抱えながら夫婦の絆によって生かされていく 7 つのサブカテゴリからなる．妻を亡くした喪失感から逃れられずにいながらも，夫婦としての思い出に生かされ，今も共にあり続けると感じることでこれからの人生を生きようとしていた．カテゴリ【これまでの役割を死別後に意味のあるものとしてつくりかえる】は，これまでの介護や元職業の役割を，死別後の社会的役割や夫役割につくりかえていく 4 つのサブカテゴリからなる．老年期になり元の職業を引退したり，妻の介護役割を担ったりしていたが，経験者としての役割が死別後の生きる目標となり，役割を果たすことで心が満たされていた．カテゴリ【死別から立ち直り妻のいない新たな生活へ踏み出す】は，喪失体験に遭遇し，自己を見失いながらも自分の生きていく力と周囲の支えによって妻のいない生活へ進んで行こうとする 9 つのサブカテゴリからなる．死別の現実から目を逸らすことで気持ちを保とうとしながらも，死別後の生き方を模索する中で，周囲の人に後押しされ自ら進んで人や社会と繋がろうとした結果，死別後の世界が広がり，生活に楽しみを見出すことに繋がっていた．カテゴリ【夫として妻の命に責任を持つ】は，医療や介護などの妻の命に関る事項に対して，夫として果たした責任についての 3 つのサブカテゴリからなる．延命治療の決断やいずれおとずれる妻の死に対する心の準備をする中で，妻の死に対する自身の考えや態度を肯定的に捉えていた（表 1）．

表 1．配偶者と死別した男性高齢者の対処と心理過程

カテゴリ	サブカテゴリ
妻を偲びながら夫婦の絆により再生される	妻のいない日々は寂しさがつきまとう
	今でも妻を恋しく想う
	妻を誇りに思う
	遺されてなお妻への自責の念が募る
	妻の遺志・夫婦としての役割を引き継ぐ
	妻との思い出に生かされていく
	死別後も妻と共に在り続ける
これまでの役割を死別後に意味のあるものとしてつくりかえる	社会における自分の立ち位置を失う
	同じ経験をしている人たちの役に立ちたいと願う
	経験者としての役割が死別後の目標・生きがいになる
	役割を果たすことで心が満たされる
死別から立ち直り妻のいない新たな生活へ踏み出す	死別という現実に直面し自己を見失う
	死別の現実から気を逸らす
	自分らしく生きていこうと自分自身を鼓舞する
	死別後の生き方を模索する
	周囲の人に後押しされて前に進む
	これからの生活に向かう気持ちが芽生える
	自ら進んで人や社会と繋がろうとする
	死別後の生活に楽しみを見出す
	周囲の人の支えにより今の自分が在る
夫として妻の命に責任を持つ	妻の治療の決断に悔いが残る
	妻の死を自然の流れの中で受けとめる
	妻への介護・看取りに満足している

これらの結果から，死別後は時には妻の死から気を逸らしたり，亡き妻を偲んだりしながらも，自分自身の生きる力と周囲のサポートによって，夫婦関係を中心としたネットワークから新たなネットワークを構築する気持ちを高めていた．また，多くの人はこれまでの社会的役割を死別

後の役割として活かしており，これらが対処行動となり得ると考えた．死別後の男性高齢者への支援では，これまでの経験を活かし意義を見いだせるような役割を継続するための支援が必要である示唆された．

２）インタビュー調査による質的研究結果（女性）

(1)対象者の概要

女性 3 名の内訳として，年齢は 70 歳代 2 名，80 歳代 1 名，死別後期間は 1 年半，3 年，9 年であった．

(2)分析結果

3 名のインタビューデータを分析した結果，108 コードが抽出され，14 サブカテゴリ，5 カテゴリが見いだされた（表 2）．

カテゴリ【あの世の夫と繋がろうとする】は，日々のふとした時に感じる寂しさを紛らわせ，遺品を身に着けることで今でも夫がそばにいると感じようとしたり，思い出により心の安定を図ろうとしたりする夫婦の絆保持により安心感を得ようとする 3 つのサブカテゴリからなる．カテゴリ【介護中の妻としての役割を意味づける】は，夫の介護を振り返り肯定的あるいは否定的に捉えながら介護・看取りを終えた妻としての役割を意味づけようとする 2 つのサブカテゴリからなる．カテゴリ【夫婦中心の生活から周囲の人たちとの結びつきへと変えていく】は，死別直後は受け入れられなかった周囲の人々の言動を徐々に死別から立ち直るためのものだと感じ取れるようになり支えられ支える存在として，夫から周囲の人たちへの結びつきへと変えていく 3 つのサブカテゴリからなる．カテゴリ【夫のいない新たな生活に踏み出していく】は，夫を亡くしひとりで生きようとしても前に進めないもどかしさが感じながらも徐々に楽しみを見つけるために行動し，夫のいない世界で生き続ける一歩を踏み出していく 4 つのサブカテゴリからなる．カテゴリ【自分の経験を人のために役立てる】は，周囲への関心が時間の経過とともに変化し，同じ経験の人たちを気にかけるようになり自分の経験を他者のために役に立てようと行動する 2 つのサブカテゴリからなる．

表 2．配偶者を看取り終えた高齢女性の死別後の対処

カテゴリ	サブカテゴリ
あの世の夫と繋がろうとする	夫のいない寂しさを紛らわす
	今でも夫が傍にいると感じようとする
	夫の思い出を懐古し気持ちの安定を保つ
介護中の妻としての役割を意味づける	介護をやり尽したと割り切る
	介護中の至らなさを自覚する
夫婦中心の生活から周囲の人たちとの結びつきへと変えていく	周囲の人の優しさ・思いやりを受け取る
	周囲の人に生かされると受け止める
	周囲の人たちと支え合う関係をつくる
夫のいない新たな生活に踏み出していく	前に進めないもどかしさに抗う
	気持ちと生活を切り換える
	日常の楽しみをみつける
	夫のいない世界で生き続ける
自分の経験を人のために役立てる	同じ体験をしている人たちを気にかける
	周囲の人のために行動する

死別後の高齢者は男女いずれにおいても老年期に至るまでに果たしてきた役割を死別後の対処に活かしていたが，男性は社会的役割，女性は家庭内での役割を活かしているという面で違いがみられた．これらインタビュー調査による質的研究の結果を踏まえて，対処行動の性差を明らかにするために以下の調査を行った．

３）質問紙票を用いたアンケート調査結果

(1)対象者の概要

1000 部配布のうち 864 名の調査票を回収した．同意なし，各尺度 2 割以上の欠損のあるものを除外した結果 608 名となった（有効回答率 70.4%）．そのうち死別者 212 名のデータを分析対象とした．

年齢区分では後期高齢者，男女比は女性，家族構成は独居の者が多かった（表 3）．

死別期間は，平均 8.6 年（±6.23）で，3 年以下が 53 名，4～5 年が 25 名，6～10 年が 59 名，10 年以上が 75 名であった．

表 3．属性 N=212

年齢	80.1(±5.59)	
	前期	34
	後期	178
性別	男性	53
	女性	159
家族構成	独居	127
	夫婦世帯	0
	三世代同居	36
	二世代同居	47
	その他	2

(2)分析結果

①Cronbach’sα係数

PGCM 全体は 0.78，死別対処尺度は 0.77 であった．

②死別対処と精神的健康との関係

死別者全員の死別対処尺度得点と WHO-5, PGCM 得点との相関はみられなかった．死別後 3 年以下では，死別対処尺度の下位項目である生活・人生志向と WHO-5（r=-0.349, P=0.0112），PGCM（r=-0.416, P=0.0021）それぞれに弱い負の相関があった．

③死別後の精神的健康の関連要因

死別後の精神的健康に関連しているのは，性別（女性），趣味がある，仲間と一緒に活動している，何らかの作品を創っている，家庭内の役割をもっているであった（表 4）．死別後の主観的幸福感に関連しているのは，前期高齢者，趣味がある，地域での役割を持っている，死別対処としての故人との絆保持，生活・人生志向であった（表 5）．

④男性高齢者の特徴

性別による WHO-5 得点の比較では女性の方が高かった（P=0.0004）が，PGCM は有意な差がみられなかった．また，死別対処尺度の「故人からの回避」の得点は，男性が高かった（P=0.0325）．

表4. 死別後の精神的健康の関連要因 1

N=212

WHO-5	標準(β)	VIF	P 値
性別(女性)	-0.20	1.04	0.0020
趣味あり	-0.16	1.21	0.0237
仲間	-0.19	1.16	0.0071
作品	-0.17	1.04	0.0095
家庭役割あり	-0.14	1.06	0.0329

※調整済み R2 乗 0.19　　stepwise 法

表 5. 死別後の精神的健康の関連要因 2

N=212

PGCM	標準(β)	VIF	P 値
前期高齢者	0.15	1.01	0.0195
趣味あり	-0.17	1.09	0.0124
地域役割あり	-0.17	1.09	0.0127
絆保持	-0.17	1.16	0.0149
生活人生志向	-0.17	1.16	0.0131

※調整済み R2 乗 0.16　　stepwise 法

これらの結果から，死別後の高齢者が趣味や家庭内・地域での活動や役割を持つことは，精神的健康を高めることが明らかとなり，それらの活動や役割を継続できるよう支援することが高齢者が満足した余生を生きるために必要であると示唆された．ただし，調整済 R 二乗は低値であり十分に説明出来ているとは言えないため，死別後の精神的健康を高めるためのより有用な活動を明らかにする必要がある．

男性の特徴としては，女性に比べて死別後の精神的健康が低く，死別対処の「故人からの回避」が高いことが明らかとなった．今後は本調査の結果を踏まえ，対象者数を拡大して調査することで，さらに男性の特徴を明らかにし，死別後の男性高齢者ならではの支援方法を確立したい．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 室屋和子，田渕康子，熊谷有記，鈴鹿綾子	４．巻 21
２．論文標題 夫を看取り終えた高齢女性のその後の対処	５．発行年 2022年
３．雑誌名 インターナショナルNursing Care research	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 室屋和子、田渕康子	４．巻 26
２．論文標題 配偶者と死別した男性高齢者の対処と心理過程	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本看護福祉学会誌	６．最初と最後の頁 107-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 室屋和子　田渕康子　熊谷由記　鈴鹿綾子
２．発表標題 高齢者の生活や社会活動と精神的健康との関連－配偶者との死別に着目して－
３．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 室屋和子　田渕康子　熊谷有記
２．発表標題 配偶者を看取り終えた高齢女性の心理と対処
３．学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuko Muroya, Yasuko Tabuchi, Yuki Kumagai, Maiko Sakamoto and Yuriko Matsunaga
２．発表標題 Coping with bereavement of elderly widowers: A qualitative study
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 室屋和子　田渕康子　熊谷有記
２．発表標題 認知症の妻を看取り終えた男性介護者の心理と対処行動
３．学会等名 日本看護研究学会第23回九州・沖縄地方会学術集会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	熊谷　有記 (Yuki Kumagai) (10382433)	佐賀大学・医学部・准教授 (17201)	
研究分担者	田島　司 (Tsukasa Tajima) (40364145)	北九州市立大学・文学部・教授 (27101)	
研究分担者	田渕　康子 (Yasuko Tabuchi) (90382431)	佐賀大学・医学部・教授 (17201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関